

史遊会通信

NO. 199
平成23年
6月12日
発行

事務局
03--3712
0651
下山田方

五月講演

徳川慶喜の実像

三戸岡道夫

歴史上に現れた徳川慶喜の一生を簡単に言うと、幕末の尊皇攘夷の世相の中で、徳川十五代将軍の慶喜は大政奉還して、二百五十年つづいた徳川幕府に幕を下した。そしてひたすら謹慎をつづけ、謹慎の解けた

隠れているのである。それは一口に言えば、(明治維新を成功させ、日本を近代国家に作り上げたのは、徳川慶喜である)ということである。

後の三十年間は、静岡において趣味におぼれた生活を送る。その間に西郷隆盛や大久保利通などが中心になった薩長勢が中心になって新政府を作り、明治維新が成功する。徳川慶喜はそうした日本の近代国家夜明けの敗者であるというのが、歴史上の一般的な慶喜の姿である。

慶喜は日本を近代国家にするための、明確な政治ビジョンを持っていた。その動機となったのは黒船の来航であった。嘉永六年(一八五三)にペリーが浦賀へやってきた。慶喜が十七歳のときである。この黒船来航によって日本国中は大騒ぎになった。この降って湧いたような困難に日本は対処できるであろうか。英米によるアジア植民地化の魔手が、日本へも迫ってきた。

しかしこれは慶喜像の氷山の一角であって、その水面下には驚くべき巨大な実像が

隠れているのである。それは一口に言えば、(明治維新を成功させ、日本を近代国家に作り上げたのは、徳川慶喜である)ということである。

例会のお知らせ

◎ 6月例会

日時 平成23年6月24日(金)

午後2時～4時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 千坂精一氏

テーマ 「戊申東北戦争」

―會津と米澤の絆

自由執筆 佐藤健一・高橋由貴彦

森下征二の諸氏

締切 6月末日

◎ 7月例会

日時 平成23年7月29日(金)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第3研修室

講演 招待講師・山田嘉久氏

テーマ 「司馬遼太郎の世界」

自由執筆 千坂精一・平山善之

隆恵の諸氏

締切 7月末日

ているのである。慶喜の考えは、

(今の日本では対処できない)

と一貫していた。その一番目の理由は、

(政権を任されている幕府が二百五十年の歴史の中で制度疲労に陥っていて、国難に対処する力がない)

からであった。制度もサビついているし、人もサビついている。

そのために慶喜は大政奉還したのである。將軍の座にいた慶喜自らが奉還したから、大政奉還できたのであって、そうでなければ成功せず、日本の国は黒船の餌食になっていたであろう。

慶喜の驚くべき慧眼は、さらに、

(幕府だけでなく、大名も制度疲労に陥っていて、不要である)

と考えていた。そのような大名の力を集めてみても、黒船来航に打ち勝つことにはできないと、慶喜は冷徹に考えていた。

(幕府も不要であるが、大名も不要)

なのである。この時点においてそこまで考えていたのは、慶喜以外に誰もいなかったのではなからうか。

しかし大名の廃止は、大政奉還のように慶喜一人だけの決断で出来るものではない。

しかし慶喜の巧妙な政治運営によって、大勢は次第にその方向に向いていき、大政奉還から四年目の明治四年(一八七二)の廃藩置県によって、実現するのであった。

さらに慶喜の頭の中には、不要なものがもう一つあった。それは公卿であった。公卿にも、幕府、大名以上に、黒船に対抗する力はない。

幕府も要らない。大名も要らない。公卿も要らない。必要なものとして残るのは、「天皇」だけであった。すなわち慶喜が頭に描いているのは、

(天皇を頂点とした、近代統一国家としての政治体制)

を作ることであった。そしてその政治体制は二院制、すなわちヨーロッパの議會制度である。その新しい制度を、幕府や各藩の下級武士、下級公卿にやらせたらいいと考えていた。すなわち人材活用である。具體的には、西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、岩倉具視、勝海舟、山岡鉄舟などのメンバーである。

最後に大きな問題がある。言わずと知れた黒船問題である。

勤皇の志士たちが、いくら、攘夷だ、攘

夷だと大騒ぎしても、黒船相手に勝てるわけがない。黒船の各国は、幕府と薩長との間に大戦争でも起れば、それをチャンスに日本へ侵入し、日本国を占領してしまうであろう。欧米のアジア侵略の最後の目標が日本なのである。

(日本がそうなつてはならない)

というのが慶喜の決意であった。そのためには日本国内に大きな内乱を起さず、外国に介入のチャンスを与えないことである。大戦乱を起さないためには、時には幕府軍がわざと負けなくてはならない場合もあるであろうし、また内乱が起きてもそれを最小限に納めるよう、コントロールする必要がある。

以上のような政治ビジョンを持って、徳川慶喜は文久二年(一八六二)、二十六歳のとき將軍後見職に就き、そして慶応二年(一八六六)、三十歳のとき、第十五代將軍に就任した。

そして將軍に就任した翌年に、その政治ビジョンに従って大政奉還し、同時に將軍職を辞任した。したがって十五代將軍といっても、その期間は一年未満であった。

大政奉還から二ヵ月ほどたった慶応三年（一八六七）に、有名な小御所会議が開かれた。それは明治天皇臨席の上に、主要な公卿、藩主、薩長を中心とした尊皇志士たちによって行われたもので、その内容を一口で言えば、大政奉還を具体的に推進する政策、すなわち王政復古の決定であった。そして慶喜に対しては、

（辞官、納地をせよ）

と決定された。しかしこの小御所会議は肝心の慶喜は出席しておらず、慶喜のいない場所での、欠席裁判であった。しかし慶喜はこれを承諾した。

この重要な会議になぜ慶喜が出席しなかったのか。それは岩倉具視たちの謀略であると歴史上は言われているが、これは表面上の解釈であり、慶喜の方から出席を断わったのである。というよりも小御所会議の内容は、事前に慶喜と岩倉具視、西郷隆盛の三人によって計画され、出席しない慶喜によって主導されていたといつてよからうか。

年が明けて慶応四年一月に、薩摩の軍と幕臣とが、鳥羽において衝突し、幕府軍は敗走した。しかしこれは大内乱をおそれた

慶喜が、幕府軍に、

（戦に勝つてはならない）

と規制していたからだった。

そして慶喜はこれをチャンスに、船に乗り、江戸へ戻った。幕府軍を置き去りにして、自分だけ逃げ帰った慶喜は、卑怯者と言われたが、これは慶喜の政治ビジョンを進めるスケジュールの一環なのであった。

江戸へ戻ると慶喜は上野寛永寺で謹慎した。そして慶応四年三月十四日に、勝海舟と西郷隆盛の会見によって、江戸城は無血開城となった。が、これもそのシナリオは慶喜が書き、勝海舟と西郷隆盛が舞台で演じたパフォーマンスであった。

それと同時に慶喜は水戸へ移り、更に水戸から静岡へ移って謹慎をつづけた。

そして江戸は東京と改名され、年号も明治へと改元され、明治維新は成功するのであった。

慶喜が静岡へ移ったのは三十二歳という若さの時であり、それから慶喜は六十一歳になるまで、約三十年間、静岡で暮した。

慶喜はその三十年間、何をしたかという、その才能にまかせて、

油絵、写真、書道、刺繍、謡曲、フラン
ス語、囲碁、自転車、大弓、打毬、鉄砲、
狩猟、放鷹、など、など……、
趣味の世界に浸って、一生を送った。

しかしなぜ慶喜ほどの政治的大局観を持った人間が、そのような趣味の世界に溺れて、一生を送ったのであろうか。

それは忠臣蔵の大石蔵之助の茶屋遊びと同じように、本心を隠すための演技だったのである。それは二百五十年前に、徳川家康が静岡から、江戸の幕府をリモートコントロールしていたように、慶喜も静岡の地から、東京の明治政府が、慶喜の政治ビジョンに従ってうまく政治を進展させていくのを、コントロールしていたのである。これが十五代将軍徳川慶喜の実像なのである。

「権力欲のない」慶喜という人間が、権力の座につき、改革を行ったから、明治維新は成功し、日本は外国に侵害されることなく、近代国家として誕生することが出来たのである。

自由執筆
震災と花見

島津 隆子

生きてゐる限り、人は幾つかの運命的な年月日を命に刻んでゐる。例えば太平洋戦争開戦は昭和十六年十二月八日、敗戦の日が昭和二十年八月十五日というふうだ。

平成二十三年三月十一日は、あの二時四十六分を共有する東日本人々の命に刻印されたことだろう。何の予告もなしに岩手県・宮城県・福島県が大地震に見舞われ、まさに未曾有の国難の日となったのだ。しかもマグニチュード9の地震と、怒涛のような津波の来襲という自然の猛威に加えて、福島原発の被災という人災まで加わった。その揺れは5強となって東京のビルをぐらぐらと揺さぶり、電車を止め、道路には帰宅難民が深夜まで列をなした。

私は家からそう遠くない街の、趣味で通うダンス教室に着いた処だった。ドアのノブに手をかけたとき揺れ始めた。変だな、目眩かな、と思ううちに、付近の高いビルが大きく揺れ出し、入り口に止めてある車

が、今にも動き出しそうにガタガタと前後に揺れていた。

気がつくとい私はなす術もなくガラスのドアに両手でつかまって、揺れが止むのを待っていた。どう考えても全く危ない位置にいたことになるが、その瞬間は何も考えられず、視界に入る二、三のビルが揺れるのを呆然と眺めていたようだ。

その後、われに返った私は逃げ足早くバスに飛び乗って、早々に帰宅した。そして目にしたのは、日頃から少女趣味と揶揄されていたリヤドロの人形と、ベネチアングラスの花瓶の割れた残骸であった。

それからの日々は余震が続き、テレビは朝から夜まで被災地の有様を写し出していた。太平洋沿岸の東北地方の町も村も壊滅的な様相を見せている。

高く築いた堤防もなんなく呑み込んで、絶壁のような津波のうねりが、地震の後の家々を、車を、漁船を、ビルを、学校を、そして高台へと逃げ遅れた人々を海へ海へとさらってゆく。そして又、これでもかと陸へと押し返す二波三波の波状攻撃は、今さらながら人智の及ばない大自然の怒りにも似た痛烈さを、まさまさと見せつけた。

それに追い討ちをかける原子炉への痛打。一体全体、日本はどうなってしまうのかと、心底胸が痛んだ。あまりの不条理と自分の無力さを痛感、深く重い無常観に沈んだ。地震も大津波も想定外、という電力会社の言い訳には、ごまめの歯軋りながら、「多くの人々を塗炭の苦しみに陥れた罪は重い。昔なら切腹ものだ！」と言いたくもなかった。

しかし、そんな独り芝居も長くは続かず、やがて諦観の境地に落ち着いた。そして、黙って動かないのは日本経済のためにもよくない。春になって桜が芽吹いてきたのを見て、急にいままでみたくもない京の桜を見たいと思った。そうだ京都へ行こう！と決めた。

先ず奈良へ行く。ホテル近くを散策し、東大寺の大仏に国の治癒平安を祈った。興福寺では国宝館で天平彫刻の傑作といわれる、二つの貌をもつ阿修羅像を観る。修羅の面持ちというより、凜とした仏の貌に魅せられる。十大弟子像のそれぞれも生きているように見えてきた。

旅のクライマックスは、京都伏見の醍醐寺の桜である。運よく桜は満開。たくさん

の花見客で賑い、まさに醍醐の花見に相応しい華やかさだ。東京のソメイヨシノに親しんだ目には、京の枝垂れ桜の姿はいかにもたおやかで優美である。大きくしだれた枝々の先までピンクに染めて咲くその姿に、思わず息を呑んだ。

この地で催された秀吉最期の宴に思いを馳せる。慶長三年三月十五日、満開を迎えた醍醐の山で、多くの諸侯と三千もの女房

自由執筆

秩父あれこれ

中山 喬央たかひら

秩父というと思い出すのは、恥ずかしながら旧石器捏造にからんだ、秩父原人説である。これは神の手が偽物だったことが分かってあえなく消えた。

その次が『続日本紀(上)』和銅元年(七〇八)の次の記事である。

春正月十一日、武蔵国の秩父郡が和銅(精錬を要しない自然銅)を献じた。そのため慶雲五年を改めて和銅元年として、和銅を御世の年号と定める。

衆の先頭には寧々の、次に茶々の、次いで童子の華やかな輿の列が続く。

茶屋では秀吉の盃の流れを頂く際、茶々と童子の間に盃の順序で争いが起きた。だが、前田利家の妻女松のとりなしで収まったといわれる。

老いた秀吉が用意周到に多くの桜木を取り寄せて植え、休憩所をしつらえ、まるでこの世の最後を飾るがごとくに演出された。

後は秩父神社の夜祭とか、セメント・銘仙等であるが、地元秩父の人達は、和同開珎の事をとても誇りにしているようである。ところが平成二十年十一月、秩父で行なわれた和銅奉獻一三〇〇年記念「和銅フォーラム」では、全く地元の期待を裏切るような発表が行なわれた。

先ず埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査、大谷徹が「知知夫国と古代遺跡」と題し、秩父の領域を、現在の秩父地方を中心とする狭い範囲と、更に児玉・大里地方を含めた広域とする二説があることを紹介した後、古墳分布の様相を説明、馬飼養地域の発生等により、鉾山資源(鉄・銅生産)の開発・利用を核とした手工業生産が扶植され和

それから二ヶ月後、六十三歳の秀吉は病床に臥す身となり、八月十八日午前二時、桃山城で帰らぬ人となった。

こうして私の今年の憂愁の花見は終わった。それから少し遅れて、東北の被災地にも桜花の季節が巡った。あくまで美々しく、力強さと儂さを秘めて咲いた桜の花々が、受難で傷ついた人々の慰めになることを切に願った。

銅奉獻への道程が拓かれたと結んだ。

次いで古銭研究家・小菅通は「和同開珎と富本銭」、市民の古代研究会講師・関口昌春は「羊太夫と和銅」、NPO法人野外調査研究所員・吉川照章が「東アジアから見た和同開珎」と題してそれぞれ発表した

が特に印象に残ったのが、午前の部の締めとなった群馬大学名誉教授・森田悌の「和銅献上の歴史環境」と題した発表であった。その内容は、改元は政治的意味合いを有するものであるから、契機となった祥瑞は作為であるとした。鉾山の展開は、武蔵国北西部と上野国西部・西毛地域との境を流れる神流川沿いで行なわれたとし、物部氏との繋がりにについても触れ、和銅と狭い意

味での秩父との関係を否定したのである。

午後の部の最初の発表者埼玉大学名誉教授・堀口万吉も「秩父の和銅とその産状」発表の過程で、狭義の秩父地方には地質学的にみて、銅鉱山の存在は在り得ないとする発言をした。後は群馬県埋蔵文化財調査事業団専門員・高島英之による「古代史のなかの和同開珎」、最後は秩父市和銅保勝会長・若林好が「和銅遺跡の研究史から」と題し、先に関口昌春が述べた羊大夫（藤原不比等伝承）との結びつき、及び荒川右岸域の自然銅出土地「黒谷」につき特に留意したいとして発表を終えた。

シンプの流れは、群大・埼大両名誉教授の発表により、狭義の秩父に和同開珎を鋳造した銅鉱石は存在しない、『続日本紀』の記事内容は粉飾であるとの考えが支配的となり、これに反発する地元熟年婦人層の果てし無い質問が続く中、会場を後にした。しかし心の中では、昭和六十二年十二月『考古学雑誌』73-2「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」の中に、「秩父鉱山」の数字が掲載されていたのにと、なにか釈然としないものが残った。

情勢が一変する。

最近入手した、東京都立産業技術高等専門学校准教授・原田洋一郎著『近世日本における鉱物資源開発の展開』を読んで驚いた。第3章に、先の秩父シンプで全く顧みられなかった狭義の秩父の鉱山について、

「武蔵国秩父郡中津川村における小規模鉱山の開発」と題して、37頁から79頁にかけて詳細に論ぜられており、その中で「中津川付近の地質はおもに中・古生層から成る。それらが石英閃緑岩など中生代以降の火成岩類によって貫かれる付近に、有用な金属鉱物の鉱床が生成されている」と明記し、金・銀・銅・鉄・鉛が産出されたことに付き、古文書資料に基づき説明しているのである。

そこで前述の『秩父鉱山』の鉛同位体比指数と、平成二年三月『保存科学第29号』に掲載された「掛川市深谷遺跡出土金属製品の保存修復研究」に掲載されている「和同開珎」18枚の鉛同位体比指数を比較検討してみた。そして、18枚全ての鉛同位体比指数が符合したのである。

具体的に説明する。

先ず秩父産鉛鉱石の鉛同位体比指数は、同位体 206、207、208 を 204 で割ったもの

と、207、208 を 206 で除した指数が、それぞれ 18.419、15.584、38.549、0.8461、2.0929 であるのに対し、最も近い R は

18.421、15.616、38.550、0.8477、2.0927、と相違指数僅か 53 である。最も離れている N でも 18.447、15.650、38.663、0.8484、2.0959 で相違指数 261 と符合している。

一方 18 枚の平均値も、18.414、15.611、38.533、0.8478、2.0926 と相違指数 68 で極めて近く、正に狭義の秩父産鉛鉱石を使用していることを物語っているのである。

【註】鉛同位体比法とは

鉛同位体比法の原理とは、鉛に含まれる質量数の異なる四種類の安定同位体の比率によって、出土鉛鉱石の鉱山を特定しようとする研究です。銅製品にはすべて鉛が含まれており、銅鉱石の鉱山特定にもそのまま応用できると考えられています。

204 (鉛) は地球が四六億年前に出来た時から変らないのですが、238 (ウラン) は半減期四五億年で 206 (鉛) に、235 (ウラン) は半減期七億年で 207 (鉛) に、232 (トリウム) は一四〇億年の半減期で 208 (鉛) となります。

一方、地球が出来た時の鉛の同位体比を

隕石を使って測定しますと、204 (鉛) 1 に対し、206 (鉛) 9.307、207 (鉛) 10.294、208 (鉛) 29.476 でした。その後、鉍山が形成される時まで 206、207、208 は前述の法則に従って増えますが、鉍山が形成され鉛鉍が固定される時期はばらばらですから、鉍山毎に違いがで

自由執筆

信徒発見

鍋屋 次郎

はるばるとローマから、極東の小さな島国である日本へキリスト教宣教のためやってきて、過酷なキリスト教弾圧の現状を目のあたりにしていた宣教師達が、長崎で日本人キリシタンを発見したときの喜びは、いかようなものであったであろうか。日本の文献ではいろいろと紹介されているが、ここに「最後の迫害」(六甲出版)から引用して、発見した宣教師たちの喜びの一端を紹介する。

元治元年(一八六五)二月十九日、長崎

ます。204で206、207、208を除いた指数は、鉛鉍石の生成年代を反映し、206で207、208を除いた指数は、鉛鉍石の性質を最も良く表わすものとされています。ここで述べているRとNは、「掛川市深谷遺跡出土 和銅開珎」の表に掲載された試料の符号です。

大浦天主堂の落成式が行われた。この祝賀には、フランス艦だけでなく、ロシア、イギリス、オランダといった長崎に停泊していたヨーロッパの全艦船が協力し、各艦長は軍服礼装に身を包み、十二名の儀仗兵を従えて大浦天主堂まで行列して式に参列しミサは厳かに行われた。

長崎湾内各艦船からは、時を同じくして一斉に祝砲が鳴り響いた。

長崎や大村の隠れキリシタンたちは、この様子をどのように見ていたのだろうか。

落成式から約一ヶ月後の日付で、大浦天主堂プティジャン神父は、元治元年(一八六五)三月十七日に、長崎教区長シラール神父宛次のような手紙を送っている。

「親愛なる教区長様、心からお喜び下さいます。私たちは、昔のキリシタンが沢山いる、

その直ぐ近くにいたのです。彼らは聖なる信仰に関する事柄をよく記憶にとどめているように思われます。私が実際にこの目で確かめ、また、意見を述べるに至った感動的な場面について、少しあなたにお話しさせてください」

「昨日十二時半ころ、大人や子どももの男女併せて十数名の団が、単なる好奇心からとは思われない様子で天主堂の前に立っていました。天主堂の門は閉まっていたので、私は急いで開けに行きましたが、私が祭壇の方に進むにつれて、それに合わせるようにこの参観者たちも私についてきました。

私は、救い主イエズス・キリストの良き記念(聖体)の御前に跪いてこれに礼拝し、彼らの心を感動させるような言葉を唇に浮かべながら、今、私を取り囲んでいるこの人達の中に、御主を礼拝する人を得させて下さいと心から祈りました。

私が少し祈った後でしたが、四十ないし五十歳の婦人が私のすぐ傍にきて『ワタシノムネ アナタノムネ ト オナジ』

と、小さな声で囁いたのです」

この小さな囁きは、大きな衝撃となって
プティジャン神父の体の中を走り抜けた。
一瞬、彼は自分の耳を疑い、その日本語に

自信を失った。本当だろうか、本当に「あ
なたの胸と同じだ」、同じ信仰だ、とこの
人は言ったのだろうか。プティジャン神父
はこのときの言葉を生涯忘れることはなか
った。また、その言葉は、ジラール神父に
そのときの感動がそのまま伝わるようにと、
話された日本語の発音のままローマ字で記
された。

『本当ですか？ しかし、あなたたちは、
どこからおいでになりましたか？』

と私は尋ねました。

『私たちは、みな浦上の者でございます。

浦上では、殆ど全部の人が、私たちとおな
じ心を持っております』

それからこの人は、すぐ私に聞きました。

『サンタマリア ノ ゴゾウ ハ ドコ？』

なんとこの人たちは『サンタ・マリア』と
言っているのです。あの全世界のカトリ
ック教徒が愛情を込めて囁く、サンタ・マ
リア！

私はもう、少しも疑いませんでした。私
は今、長い間待ち焦がれていたあの日本の

キリシタンの子孫を目の前にしているので
す。私はこの慰めを深く深く主に感謝致し
ました。

この愛する人達に取り囲まれた私は、あ
なたがフランスから持参して下さった聖母
の御像が安置してある祭壇に彼らを導きま
した。彼らは私に倣って全員跪いてお祈り
を唱えようとしたが、喜びのあまり聖
母の御像の前で口々に何か言い始めました。
『そうだ、本当にサンタ・マリア様だよ！
ご覧よ、ほれ、御子ジェズ様を御腕に抱
いていらっしゃる』

今まであらゆる手を尽くしても見いだせ
なかつたキリシタンの子孫が、二百五十年
の時を超えて今、目の前で親しみを込めて
サンタ・マリアと御子イエズスの御名を正
しく口にしている」

以上、神父達の喜びの一端を紹介したが、
信徒発見という日本キリシタン史の画期的
出来事は、神父たち、ローマカトリックに
おいても驚異的出来事であったが、この一
瞬から日本キリシタン史上最大の三千人を
超える「最後の迫害」（浦上事件）が始ま
ったのである。

(終)

事務局だより

▼7月の招待講師の紹介

山田嘉久氏

協和銀行退職後、同行厚生年金基金に勤務。
昭和43年頃から司馬遼太郎に魅せられ、現
在に至る。

▼魔鏡を見に行こう！

鍋屋氏のお骨折りで大磯に魔鏡を見に行く
計画をたてました。

月 日 7月8日(金) (雨天決行)

集 合 JR大磯駅改札口 12時40分

会 場 澤田美喜記念館

参加費 千円(当日集金)

参加希望者は6月24日の例会日まで、事
務局へお申し込みください。

当日の急な連絡は 090-1808-6478 鍋屋へ

▼訂正のお願い

史遊会通信 第198号 6頁3段7行目

西漸政策→東漸政策

▼例会日の時間に注意してください。

6月24日(金)午後 午後2時より

7月29日(金)夜間 午後6時より

9月からは第3金曜日の午後